

# 除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの 構築に関する研究（その4）

～雪を介した住民の互助、公私協働の諸実践から除雪ボランティア活動が学ぶべき視点～

高 橋 和 幸

## I. はじめに

本研究（その1）<sup>1)</sup> から（その2）<sup>2)</sup> までは秋田県「大仙市雪まる隊」を事例に除雪ボランティア団体活動の発展過程と活動がもたらす効果について調べた結果を提示した。（その3）<sup>3)</sup> では、同隊の活動者に対するアンケート結果の分析を予定していたが、東日本大震災により大仙市社会福祉協議会が岩手県沿岸地域へのボランティア派遣と連絡調整に繁忙となり、調査協力依頼をすることが困難になったことから、研究方法を切り替えた。積雪の多い地域の新聞紙面に掲載された除雪ボランティア活動を調べ紙上コメントに注目し活動者、利用者、支援機関がどのように考えたか分析し活動効果について検討した。

2010（平成22）年12月～2011（平成23）年2月にかけては豪雪となり、新聞紙上調査によって除雪ボランティア以外にも雪を媒介とした様々な住民の協働活動が見受けられた。たとえば、高齢者宅の除雪以外にも通学路や公共施設、伝統芸能を発表する会場、雪まつりの会場、倒壊の危機に瀕したブドウ棚の除雪、他地域から人を呼び寄せ除雪ボランティア活動者の養成を行っていたり、ときにはグリーンツーリズムの一環としての除雪体験を取り入れたりしていた等である。換言すれば雪を媒介として前向きな協働活動の数々が地域の良好な人間関係づくりに一役買い、地域に活気を取り戻すきっかけづくりとなっているように思われた。

そこで引き続き、新聞紙上調査をおこなった。本稿（その4）では、除雪ボランティアと近接し、あるいは重複も多い「雪を媒介とする住民の互助や公私協働活動としての射程範囲」がどのあたりまでなのかを知りたいと思い、改めてこの観点から調べを進めることにした。また興味をもってこうした活動に参加者が集まっていることを踏まえ、その興味を引くための要素や工夫がどのようなところで発揮され、それを除雪ボランティア活動をする際に取り入れられないかという視点も重視して考察してみることとした。

## II. 方法

### 1. 調査方法

新聞記事の調査をおこなった。まず、東北6県の地方新聞のうち各県で最も発行部数の多い新聞社を対象とした。青森県のように太平洋側から日本海側まで広範囲な面積をもち積雪量も違いがある県についてはそれを考慮し2社を採用した。また、内閣府の調べ<sup>4)</sup> では平成23年度（2011年（平成23）年11月1日～2012（平成24）年3月29日迄）の雪害による死亡者130人を地域別に見た場合、最も多いのが北海道の30人、次いで新潟県の26人となったことから、北海道と新潟の新聞社を追加し、最終的には8道県の地方紙を調査対象とした。対象紙は、北海道は北海道新聞、青森県は東奥日報（本社青森市）とデーリー東北（本社八戸市）、岩手県は岩手日報、秋田県は秋田さきがけ新報、宮城県は河北新報、山形県は山形新聞、福島は福島民報（但し積雪の多い会津版を選択）、新潟県の新潟日報とした。

上記9紙の2012（平成24）年1月1日から2月29日までの2か月の記事を調べ、雪に関するもの全て

をピックアップした。対象期間を1,2月にしたのは、積雪の最も多い時期だからである。なお、夕刊が発行されている地方紙（北海道新聞、東奥日報、新潟日報）については合わせて調べることにした。

## 2. 調査項目と事例検討に入っていくための分類整理方法の紹介

### （1）新聞に掲載された雪に関する記事の収集

新聞に掲載された雪に関する該当記事をマイクロソフトエクセルに要約して転記することから始めた。なお、今回の調査では住民の互助、公私協働による除雪や雪を介した活動関連の記事を収集することを目的としたことから、スポーツ面のウィンター・スポーツ（競技）は除くことにした。

### （2）除雪ボランティアとそれ以外の記事を分類

各紙の2か月間の雪に関する記事を、除雪ボランティアの記事とその他の記事にまず分類してみた。その結果は表1のとおりとなった。

雪に関する記事数（表1）

単位：件

	雪記事全体	除雪ボランティア	その他		雪記事全体	除雪ボランティア	その他
北海道新聞	236	5	231	山形新聞	321	43	278
東奥日報	245	22	223	河北新報	76	0	76
デーリー東北	113	8	105	福島民報	172	9	163
岩手日報	93	3	90	新潟日報	252	25	227
秋田さきがけ	253	19	234	計	1,761	134	1,627

雪に関する記事が1,761件で、そのうち除雪ボランティア活動は134件（7.6%）を占めた。除雪ボランティアの掲載件数で一番多いのは山形新聞で43件、次いで新潟日報の25件、東奥日報の22件、秋田さきがけ新報の19件であり、積雪の多い日本海側での掲載が多い傾向を示した。なお、除雪ボランティア活動以外の、その他の記事の方が圧倒的に多かった。

### （3）除雪ボランティア以外の記事（1,627件）の構成比を見る

除雪ボランティアの記事以外の、その他の記事とは、どのようなもので構成されているかについて分類し、表2にまとめた。

除雪ボランティア以外の記事 1,627件の内訳（表2）

単位：件

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
北海道新聞	41	41	3	8	3	2	0	2	0	1	21	11	93	0	5
東奥日報	14	29	1	3	2	4	0	3	0	0	11	22	126	1	7
デーリー東北	3	22	0	2	4	4	1	1	0	0	7	10	51	0	0
岩手日報	6	34	2	4	2	2	1	1	0	1	9	0	23	1	3
秋田さきがけ	10	40	1	10	7	1	5	2	5	3	31	26	81	1	12
山形新聞	14	46	5	10	8	5	2	4	0	0	12	31	135	2	4
河北新報	5	4	0	1	3	0	1	0	0	0	5	7	46	1	3
福島民報	20	47	6	13	16	9	0	2	0	2	8	4	25	2	9
新潟日報	6	44	1	11	15	0	4	2	0	1	6	16	110	4	7
総計 (1,627)	119	307	19	62	60	27	14	17	5	8	110	127	690	12	50

※注）横軸の①は市町村主催規模の雪祭り等イベント、②実行委員会やNPO等主催の雪に関するイベント、③町内会や地元商店街等小地域の雪祭り等、④雪に関する小中高校、大学イベント、⑤雪を活用した地域同士の交流イベント、⑥住民のためのスキー大会、⑦雪にまつわる伝統芸能、⑧雪害救助法の学習会、⑨屋根の雪おろし安全講習会、⑩雪道安全運転講習会、⑪雪に関する観光名所PR・資源活用、⑫除雪等行政施策、⑬雪害事故や被害状況の紹介、⑭協働除雪、⑮その他である。

除雪ボランティア以外の記事1,627件のうち最も多くを占めたのが⑬雪害事故や被害状況の紹介といったニュースの掲載であった(690件、42%)。二番目は②実行委員会やNPO等主催の雪に関するイベント(雪祭りの他にも雪上散策等多彩な催し物)が(307件、19%)、三番目に⑫除雪等行政施策(行政サービスとしての道路除雪の他、自治体防災協定での除雪応援、広域除雪ボランティア連絡調整含む)が(127件、8%)、四番目に①市町村主催規模の雪祭り等イベント(119件、7%)、五番目に⑪雪に関する観光名所PR・資源活用(110件、7%)となっていた。⑭住民協働除雪についての記事は(12件、0.9%)と極僅であった。

#### (4) 事例検討の方法

前稿では除雪ボランティアの活動効果について新聞紙上コメントから検討を試みたため、除雪ボランティアと合わせて他のことを行っているという実践を除き今回の調査では、除雪ボランティア活動そのものの記事にはあえて注目しなかった。むしろ、雪を媒介とする住民の互助や公私協働の実践に焦点を当てた。前述のとおり雪に関する記事全部で1,761件あり、そのうち雪を介しての住民互助、公私協働の特色が集中的に見られた記事、74件に絞って抽出する作業をおこなった。

事例検討の方法には悩んだが、広範囲に及ぶ事象が複雑に絡んで動きを見せる現場を描き出すために、何の目的でその行動が取られたかを中心に検討する必要があるため、データである掲載記事を断片化し分析することが好ましくないと判断した。そこで、一文ごとに見ていき、複数のキーワード(コードになるような用語)がある場合でも1事例につき1回のみカウントする形で分類整理した。たとえば、防災協定を結ぶ地域からの応援を得たり、広報力を活用して広域で行政がボランティアの連絡調整を行ったりして一斉除雪を行う際に、地元住民が協力する実践の記事記載もみられ、これらを便宜上、除雪等行政施策に分類した。雪を介した住民の互助・共助活動の一環ととらえると二つの側面を有しているがコードの集約化を図ることを優先した。なお、カテゴリ分けする際に注目した部分には下線を付した。

### Ⅲ. 結果

上記の方法で分類整理した結果、【カテゴリーⅠ】資源活用、【カテゴリーⅡ】学習効果、【カテゴリーⅢ】行政施策、【カテゴリーⅣ】行政主導型協働の除雪、【カテゴリーⅤ】民間主導型協働の除雪のように5つのコードに集約された。また、【カテゴリーⅠ】資源活用、【カテゴリーⅡ】学習効果は、趣が異なる①と②のような中項目(サブカテゴリー)を設け、a,b,c…のような小項目も合わせて設けた(表3～表9)。

なお、新聞紙上においては参加した市民がコメントと共に実名で報道されているため、プライバシー保護の観点から該当箇所は削除した。

#### 【カテゴリーⅠ】《資源活用①》 (表3)

a.除雪を観光資源に取り込む(2)	・秋田内陸線モニターツアーが開催された。東京で旅行関係を学ぶ専門学校生が仙北市を訪れ意見交換しながら、「高齢者宅の除雪ボランティアとスキー体験をセットにした観光のモニターツアー」等が提案された。仙北市にて(秋田さきがけ2012/2/28, 25面) ・雪かきと雪遊び体験をセットにしたツアーを開催した。子どもたちは駅舎から線路除雪車を観察した。糸魚川市にて(新潟日報2012/1/31, 19面)
b.グリーンツーリズムの一環(2)	・鶴子集落では民間学校等を受け入れている。その一環で神戸風川学院大学の学生3人を受け入れた。大学生は高齢者宅の雪かき作業を手伝ったり、雪像づくりを体験したりしながら、暮らしと文化を学んだ。3人は「こんなに多くの雪は初めて。食べ物もおいしいし、みんなやさしく接してくれる。気候と違って人がとても温かい。自然が豊かで尾花沢は魅力がいっぱいある。これからの様々な活動を通じて、地元の人の力になれば」と話していた。尾花沢市にて(山形新聞2012/2/9, 14面)

	・茨城県那珂市にある那珂一中の１年生は、猪苗代町の仮設住宅など４か所で除雪のボランティア作業に取り組んだ。同校は毎年、猪苗代町内のスキー場を訪れており、東日本大震災で被災した福島県のため、何か役に立ちたいと実施した。那珂市は積雪がほとんどないため、スノーダンプやスコップを使う除雪は初めての生徒がほとんど。力を合わせて自分の身長よりも高く積もった雪を捨て場に運んでいた。中一男性は「雪を片づけるのは大仕事。少しでも喜んでもらえればうれしい」と話していた。仮設住宅自治会長女性（５１）ら双葉町から避難している住民は「慣れない作業なのに、一生懸命取り組んでくれて、感謝している」などと話していた。生徒らは仮設住宅の子どもたちと一緒に豆まきも楽しんだ。猪苗代町にて（福島民報2012/2/7, 18面）
c.少子化対策への雪の活用（１）	・上杉雪灯籠まつり会場で、米沢市農業委員会が農家男性のために婚活支援「愛☆婚シェリジュ」を開催。地元野菜を使った料理、雪灯籠作りをしてもらった。山形県米沢市にて（河北新報2012/1/28, 26面）
d.雪害対策への地場産品活用（１）	・雪の影響による果樹の枝折れを支柱で防止。間伐材を支柱として有効に利用しようとしている。山形県金山町にて（河北新報2012/2/2, 8面）

### 【カテゴリーⅠ】《資源活用②》（表４）

雪を介した被災地支援（10）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島から山形県に避難している小学生を対象にしたスキー教室を開催。山形市蔵王にて（山形新聞2012/1/12, 15面）</li> <li>・気仙沼の児童らが夏油高原でスキーを楽しむ。岩手県北上市にて（河北新報2012/1/17, 27面）</li> <li>・青森県青年海外協力会の主催により、福島県大隈町の被災児童がモヤヒルズでスキー体験をした。青森市にて（東奥日報2012/1/14, 21面）</li> <li>・郡山市の小学生が東成瀬小学校の児童とスキー場にて交流。村が県の補助金を使って招待した。東成瀬村にて（秋田さきがけ2012/2/20, 25面）</li> <li>・避難者相談所を訪れた親子と雪遊びを楽しむ。新発田市にて（新潟日報2012/1/6, 30面）</li> <li>・被災児童らが雪遊びに夢中。一戸町にて（岩手日報2012/1/7, 18面）</li> <li>・被災地の大船渡の市民が横手市にてミニかまくらづくりを楽しむ。横手市にて（秋田さきがけ2012/2/14, 21面）</li> <li>・越後雪かき道場が企画し、福島県からの避難者が雪かきのコツを学ぶ。郡山市から避難する歯科医師男性は「長岡は郡山の１年分の雪が一晩で降る。福島は雪よりも重いので、除雪用具の使い方は大変勉強になった」と話した。長岡市にて（新潟日報2012/1/11, 26面）</li> <li>・東日本大震災被災者に、雪道安全運転講習を開く。新潟市秋葉区にて（新潟日報2012/1/20, 12面）</li> <li>・長井市内の建設会社２社が除雪ボランティアを行った。西根小学校の校舎の屋根の雪おろしを那須建設が、震災避難世帯の雪おろしを梅津建設が行った。長井市にて（山形新聞2012/1/29, 18面）</li> </ul>
----------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### 【カテゴリーⅡ】《学習効果①》（表５）

a.安全な除雪方法を学ぶ活動（６）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防署員がはしごの昇り方と押さえ方の見本をみせる雪おろし作業の講習を開催。湯沢市にて（秋田さきがけ2012/1/12, 19面）</li> <li>・安全な雪おろしを学ぶための講習会を開催。大仙市にて（秋田さきがけ2012/1/25, 21面）</li> <li>・安全な雪おろしを行うための講習会を開催。消防署員の見本から学ぶ。秋田市河辺にて（秋田さきがけ2012/2/8, 21面）</li> <li>・安全な雪おろしを学ぶ講習会を開催。藤里町にて（秋田さきがけ2012/2/10, 18面）</li> <li>・雪おろし事故防止講習会が開催される。湯上市にて（秋田さきがけ2012/2/21, 20面）</li> <li>・越後雪かき道場では雪の事故防ぐための命綱システムを、登山道具を活用して考案し、普及を目指している。長岡市にて（新潟日報2012/2/25, 16面）</li> </ul>
b.啓発活動（１）	・尾花沢警察署は除雪作業事故注意を呼びかけるため、一人暮らし高齢者宅等の訪問活動を行った。尾花沢市にて（山形新聞2012/2/26, 19面）

### 【カテゴリーⅡ】《学習効果②》（表６）

a.除雪を通じたスポーツ振興（２）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サッカー J2モンテディオ山形の初戦開催に備え、県総合運動公園スタジアムの除雪を市民サポーターも協力して行った。天童市にて（山形新聞2012/2/26, 26面）</li> <li>・アルビレックス新潟が使用する新潟聖籠スポーツセンターアルビレッジで、市民協力者140人が天然芝の雪寄せ作業を行った。雪消えを進め練習環境充実化に向けて。市民はスノーダンプなどを持ち寄った。中２男性（14）は「選手がいい状態で練習できるように一生懸命に作業した。今年はたくさん点を取って勝ってほしい」と話した。新潟市にて（新潟日報2012/2/27, 1面）</li> </ul>
-------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



b.文化財や作品保全を目的とした除雪ボランティア (3)	<p>・公益社団法人土木学会が土木遺産に選んだ鉄橋を雪から守るため、地元保存会が除雪するボランティアを行った。幌加内町にて(北海道新聞2012/2/29, 30面)</p> <p>・三本木原開拓の祖、新渡戸傳が眠る「太奏塚」は地元の老成会や町内会、有志らによって清掃奉仕によって守られている。清掃ボランティアの活動は、春の雪解け後の落ち葉回収に始まり、夏は除草作業、秋は落ち葉集め、冬は雪かきと一年中行われる。十和田市にて(デーリー東北2012/2/23, 4面)</p> <p>・空き家や廃校を活用した30施設で芸術祭を実施している。作品を雪から救うためNPO法人越後妻有里山協働機構は除雪作業を行った。十日町市にて(新潟日報2012/2/4, 15面)</p>
c.伝統芸能活動の一環としての除雪活動 (2)	<p>・地元には伝わる黒川能が行なわれる春日神社境内を山添高校の生徒が除雪するボランティアを行った。高校1年次に能を習うのが縁で黒川能が行なわれる会場準備の一環として。鶴岡市にて(山形新聞2012/1/31, 13面)</p> <p>・鯉ヶ沢町の赤石芸能保存会はこのほど、赤石町内会の一人暮らしのお年寄り宅10世帯を回って除排雪を行う奉仕活動を行った。今年で6年目。会員15人が参加した。スコップや除雪機、軽トラック数台を準備し、玄関まわりを中心に1軒あたり30分ほどかけながら除排雪した。会長は「地域の人たちには日ごろからお世話になっている。これからも地域のために続けたい」と話した。鯉ヶ沢町にて(東奥日報2012/2/18, 22面)</p>
d.除雪対策資金への協力 (2)	<p>・記録的な大雪に見舞われたため除雪費がかさむ中、妙高市豪雪災害対策本部では除雪費などに充てるための義援金を募ることにした。妙高市にて(新潟日報2012/2/10, 15面)</p> <p>・小千谷中学校生徒会は豪雪対策費に役立ててほしいと、古紙回収で得た資金10万7千円を市に寄贈。生徒会役員中3女性は「義援金はみんなで相談して決めた。豪雪で困っている人たちのために使ってほしい」と。市長は「ありがたい、有効に使わせてもらいます」と感謝した。小千谷市にて(新潟日報2012/2/22, 13面)</p>
e.除雪で資金を貯め地域の環境整備 (1)	<p>・用水堰への転落事故を防ごうと、自分たちの手でガードレールを設置する取り組みを行っている。除雪奉仕の労賃などを貯めて費用に充て、これまでに約500mにわたって設置した。地域の安全を自分たちで守ろうという取り組みが他の町内会からも注目されている。十和田市にて(東奥日報2012/2/27, 16面)</p>
f.除雪ボランティアの学習効果(3)	<p>・除雪ボランティア経験は、若者が除雪の方法や意義を学ぶ機会でもある。札幌市とその近郊の男子大学生292人にアンケートを行い、除雪ボランティア経験について調査した結果、東北の日本海側など道外豪雪地の高校出身者の38.5%が除雪ボランティアを経験していたのに対し、札幌市内の高校出身者は7.7%、札幌以外の道内高校出身者は20.2%に留まった。この結果から「道内は地域で助け合う文化が希薄といえるのではないか、道内の学生に一度は除雪ボランティアを経験させたい」と元北海道大学教授は指摘した。札幌市にて(北海道新聞2012/1/30, 15面)</p> <p>・東日本大震災支援活動のために結成された官民19機関でつくる由利本荘地域震災対応地域活動ネットワークが、地元で除雪ボランティアを行う。秋田県立大学の学生を含め4機関から44人が参加し、高齢者宅13軒を除雪した。由利本荘市にて(秋田さきがけ2012/1/29, 24面)</p> <p>・東日本大震災でボランティアをした市民有志と札幌市社会福祉協議会が、市内の高齢者宅等で除雪ボランティアを行う「札幌スノーバスターズ」を結成した。住民代表が「被災地に駆けつけた市民の結束力やパワーを地元での除雪奉仕活動に生かせないか」と提案したのがきっかけに。市社協は引き続き除雪希望世帯と除雪チームメンバーを募集している。札幌市にて(北海道新聞2012/2/7, 25面)</p>
g.除雪ボランティアの更なる福祉効果 (4)	<p>・大曲養護学校高等部の生徒と住民が、除雪ボランティアを行った。3月まで計7回実施予定。この日は近所のお寺を除雪。住職男性(64)は「窓付近の雪がなくなり、本堂の中が明るくなった。除雪に協力してもらい本当にありがたい」と。3年生男性は「雪が硬くて大変だったが、地域の役に立てると思うとうれしい」と話した。大仙市にて(秋田さきがけ2012/1/25, 21面)</p> <p>・比内養護学校高等部の生徒による除雪ボランティアが行われた。校舎近くの一人暮らし高齢者宅、2軒で行われた。同校は2008年から生徒が除雪隊と銘打ち実施してきた。利用者女性(75)は「屋根から落ちてくる雪が多いので、すごく助かっている」と喜んだ。大館市にて(秋田さきがけ2012/2/15, 20面)</p> <p>・羽後町の障害者支援施設の20代利用者6人が、町内の60代一人暮らし女性宅の除雪ボランティアを行った。女性がデイサービスを利用する際に歩行が楽になるよう除雪した。羽後町にて(秋田さきがけ2012/2/25, 25面)</p>

	<p>・西和賀町スノーバスターズは出動式を行い、今季の活動をスタートさせた。中高生を含む住民約150人が助け合いの心で高齢者宅の除雪に汗を流した。出動式は沢内農業者トレーニングセンターで行われ、会長・男性が「雪が降り続いて気も沈みがちだが、若い力で元気づけてほしい。交流も大事にしよう」とあいさつした。メンバーを代表して西和賀高2年男性は「震災で学んだ人のつながりの大切さを自分の地域で生かし、みなさんの支えになれるよう活動する」と決意を述べた。参加者は20班にわかれて活動した。スノーバスターズの会員は約300人で、降雪期の終わる3月まで毎月1回を統一活動日とし、町内116世帯を対象に除雪を行い、除雪の必要がない場合は安全確認と訪問声掛け活動を行う。西和賀町にて（岩手日報2012/1/16, 18面）</p>
h.大学生の実習（3）	<p>・愛知県立大学の学生が舟形町を訪れ除雪ボランティアを行った。学生たちは各地で認知症予防の講演会を開いたり、除雪ボランティアをしたりしている。今回は冬期間の除排雪の高齢者の苦勞を知ることも目的として訪問した。4年生女性は「住民とふれ合い、地域のつながりを強く感じた。貴重な体験ができた」と話した。舟形町にて（山形新聞2012/2/19, 16面）</p> <p>・いわき明星大学の学生30人が、一般教養科目である「災害ボランティア」の実習として除雪ボランティアを行った。町社会福祉協議会のアドバイスを受けながら、一人暮らし高齢者宅で雪おろしを行った。住宅をすっぱり囲った雪をスコップなどでかき出し、屋根に積もった雪も慎重におろした。利用した女性（84）は「昨年に続き、今年も雪が多く困っていた。本当に助かる」と感謝していた。三島町と金山町にて（福島民報2012/2/14, 10面）</p> <p>・早稲田大学生、十日町市の高齢者宅で除雪ボランティアに取り組む。「学生の価値観を広げ、身体感覚を豊かにする」として保健体育の授業単位に認定している。利用者女性（74）は「ここで暮らせるのが一番。自分では雪かきができないので、本当に助かった」と。大学生男性（21）は「雪が固くて苦戦した。でも楽しい感覚でボランティアができた」と。十日町市にて（新潟日報2012/2/7, 29面）</p>

### 【カテゴリーⅢ】行政施策（表7）

a.除雪困難者の公的支援（3）	<p>・岩見沢市は雪の重みによる家屋の倒壊を防ぐため、市内の独居高齢者宅等で雪おろし支援を始めた。自力除雪が困難な75歳以上の独居や身体障害者世帯を対象とした。雪おろしは無償だが、排雪費用は住民が負担する。市が約3千の対象世帯を調査し、危険な状態にある32世帯への支援を決めた。この日は、業務を委託された岩見沢建設協会加盟の建設会社の作業員が山間部の12世帯に出向き雪をおろした。利用者男性（81）は「毎年自然に落ちる屋根の雪が落ちずに心配だった。ありがたい」と話した。残り20世帯も1週間以内に作業を終える予定。1軒あたり5～6万円の費用は市の災害応急事業費から支出する。岩見沢市にて（北海道新聞2012/2/26, 35面）</p> <p>・冬場の雪寄せが大変な一人暮らし高齢者を迎え入居してもらう福祉アパート制度を行っている。それを津南町社会福祉協議会に隣接させている。津南町にて（新潟日報2012/2/4, 27面）</p> <p>・福祉の雪事業は、高齢者世帯や障害者世帯に対して、屋根の雪おろしや雪寄せにかかる費用の8割を助成する。2割は自己負担で、支給上限額は4万円となっている。北秋田市の一人暮らし女性（80）は既に、今冬4回目の除排雪を依頼した。北秋田地域シルバー人材センター会員の男性（70）と（62）の2人が、雪を軽トラックに載せ何度も雪捨て場に運んでくれた。除排雪する作業員は、市社会福祉協議会や北秋田地域シルバー人材センターを通して派遣され、屋根の雪おろしは1時間あたり1人2600円、雪寄せは1人1400円。雪捨て場に軽トラックを使えば1時間に920円がかかる。今冬は、雪おろしと雪捨てなど1回で8万6千円（自己負担4万6千円）が掛った世帯もあり、大雪が家計にずしりときている。北秋田市にて（秋田さきがけ2012/2/7, 25面）</p>
b.ユニークな除雪支援（2）	<p>・市役所が安全に雪おろしを行うための用具（命綱・安全帯・ヘルメットの一式）を貸出しているが、大雪で要望が多く寄せられたため、更に20セットを追加整備した。弘前市にて（東奥日報2012/2/9, 19面）</p> <p>・一人暮らし高齢者宅等への市職員の公務除雪が行なわれているが、青森市では「スノーレスキュー隊」と名付けている。青森市にて（東奥日報2012/2/21, 21面）</p>
c.除雪弱者の声を聞く機会（1）	<p>・市民や除雪業者、市で構成する帯広市総合除雪連絡協議会の臨時総会が開催された。市民からは「老老除雪」や「除雪弱者」を支援する体制づくりを求める声が相次ぎ、「89歳の私の除雪を、73歳の男性が手伝っている」と切実な訴えもあった。帯広市にて（北海道新聞2012/2/10, 夕刊12面）</p>

## 【カテゴリーⅣ】行政主導型協働の除雪(表8)

a.防災協定による交流の一環としての除雪(3)	<p>・東日本大震災の時に友好都市を結んでいた岩沼市に義援金や炊き出しを送ってもらったお礼にと、尾花沢市に岩沼市職員19人が除雪ボランティアに訪れた。利用者女性(80)は「一人暮らしで雪が降るたび不安になる。みんなに手伝ってもらい、本当にありがたい」と。岩沼市職員男性(25)は「雪かきはかなりの重労働だけど、少しでも喜んでもらえれば」、男性(33)は「尾花沢は大雪で大変と聞き、参加を志願した。震災の時に助けてもらったので、恩返しできればうれしい」と話した。尾花沢市にて(山形新聞2012/2/4,14面)</p> <p>・災害協定を結ぶ東京都板橋区の職員が、最上町を訪れ除雪ボランティアを行った。同町は災害時相互援助協定のほかにも物産や観光などの分野でも板橋区と交流している。派遣された30代中心の職員たちは雪かきのコツを教わった後、町立病院や福祉施設にて除排雪作業を行った。最上町は昨年原発事故で都内の浄水場から放射性物質が検出された際、飲料水500ミリリットル入りのペットボトル2万本を同区に送り、乳幼児に配れるように支援したこともある。区職員男性(50)は「すぐに汗だく。雪がこんなに重くて大変だと思わなかった。3日間精いっぱい頑張りと、少しでも最上町の力になりたい」と話した。最上町にて(山形新聞2012/2/8,14面)</p> <p>・糸魚川市と災害時の相互応援協定を結ぶ長野県塩尻市の職員が除雪支援に訪れた。小学校や公民館等の公共施設の除雪に従事した。市職員男性は「塩尻も雪は降るがこんなに積もらない。雪質が重くて力がある。少しでも役に立てれば」と話した。糸魚川市にて(新潟日報2012/2/8,13面)</p>
b.広域的な共助を実現した除雪(10)	<p>・国土交通省が推進している「共助による地域除雪の実践活動」が尾花沢市丹生地区で行われた。住民らが手順やルール、時間等を決めた上で、協力して雪処理を行う取り組み。この日は県の広域除雪ボランティア育成事業として東北工業大学の学生10人と地元住民70人が参加し、高齢者宅3軒の除雪作業をした。作業後は共助による地域除雪の効果と課題について意見交換を行った。尾花沢市にて(山形新聞2012/2/20,27面)</p> <p>・郡山市のNPO法人「ハートネットふくしま」は19人が参加して只見町内で除雪ボランティアを実施した。同団体が町内で雪おろしボランティアを実施するのは今年で15回目となった。2011年7月の豪雨で甚大な被害が出た黒谷入地区で、屋根の上や民家脇に積もった雪を取り除いた。豪雨災害時にもボランティアで訪れた参加者もいて現状を確認していた。町内のボランティア受け入れ団体・シェルナッハの会の代表は「水害の際にハートネットふくしまの方々がいち早く駆け付けてくれて助かった。これも長年の雪おろし交流があったから」と話している。只見町にて(福島民報2012/2/7,14面)</p> <p>・連合の構成組織で百貨店やチェーンストアなどが加盟する「サービス・流通連合」は1月下旬から2月下旬にかけて2回にわたり延べ6日間、会津地方で除雪ボランティアを行った。東日本大震災の被災県支援の取り組みで、会津若松市、猪苗代町、北塩原村の各社会福祉協議会と連携し、高齢者世帯や福祉施設、仮設住宅などを中心に実施した。参加者は北海道から沖縄まで全国から駆け付け、「少しでも不便や不安の解消につながれば」とボランティアに励んでいた。会津若松市、猪苗代町、北塩原村にて(福島民報2012/2/10,16面)</p> <p>・除雪事故の発生や作法を学び防止するために作られた「越後雪かき道場」が開講5年を迎えた。経験のない除雪ボランティアの市民に講習し、除雪に慣れた地元住民には師範になってもらっている。代表は「他人に教えることで地域の人は雪の危険性を再確認できた。住民にも学びの場が必要だと知った」と話した。また、長野県社会福祉協議会男性職員(30)は「長野県飯山市では越後雪かき道場の協力を得てのれん分け、独立できた。名古屋や関東からの除雪ボランティア参加者が増え、交流の輪が広がった」と話した。長岡市にて(新潟日報2012/1/22,12面)</p> <p>・越後雪かき道場が長岡市木沢集落で開かれる。除雪ボランティアの養成を目的にNPO法人中越防災フロンティアと地域おこし団体フレンドシップ木沢が共催する。廃校舎グラウンドで雪かき練習をした。埼玉県公務員男性(38)は「除雪のネットワークをつくれなかと参加した。やってみないと分からないので貴重な体験になった」と話した。長岡市にて(新潟日報2012/2/12,23面)</p> <p>・長岡市小国地区で、首都圏など県内外から集まったボランティア18人で除雪ボランティアを行った。参加した18人は新潟県が運営するボランティア組織「スコープ」のメンバーで、この日は30世帯を回った。参加者男性(38)は「筋肉痛になりそう。これを毎日やるのは大変」と苦笑い。利用者女性(72)は「家の中が真っ暗だった。一人暮らしだから、とても助かる」と感謝した。長岡市にて(新潟日報2012/1/29,31面)</p> <p>・新潟県が運営するボランティア組織「スコープ」応援隊として埼玉県庁職員30人が除雪ボランティアを行った。利用者女性(76)は「除雪が間に合わなかったのが助かりました」と感謝。埼玉県職員男性(44)は「役に立てればと参加した。すぐ片付けられると思ったら全然進まないですね」と話した。長岡市にて(新潟日報2012/2/5,1面)</p>



	<p>・妙高市内の要援護世帯の除雪を支援する雪おろし隊の活動が終了した。新潟県内各地の建設業協会支部や消防団などで構成された雪おろし隊は、４日間で延べ1003人が活動した。応援に駆け付けた下越地方の作業員は雪おろし経験が少ない人が多く、硬くて重い雪に手こずっていた。県公園緑地建設業協会の理事・男性は「スノーダンプの扱い方に戸惑ったが、地元の人に教えてもらっていい勉強になった。お役に立てて光栄です」と話した。妙高市にて（新潟日報2012/2/7, 21面）</p> <p>・新潟県が運営するボランティア組織「スコップ」が募集した除雪ボランティアのメンバーと新発田市社会福祉協議会の職員らが市内中々山地区で除雪ボランティアを行った。女性（71）は「雪に覆われていた給油タンクや給湯設備を掘り起こしてもらい、給湯できずに風呂に入れない日が10日ほど続いたので助かります」と笑みを浮かべた。埼玉県の会社員男性（42）は「体力には自信があるけど、雪は重たかった」と話した。新発田市にて（新潟日報2012/2/16, 12面）</p> <p>・福島県会津地方振興局では過疎、高齢化が進む集落で、住民の生活を支援する「会津の田舎を守り隊」事業を実施して、除雪ボランティアもその一環となっている。同局では県内から大学生ボランティアを募り、三島町の一人暮らし高齢者宅で「雪かたし」を行った。作業日には福島大、会津大、いわき明星大、いわき短大から約30人が参加した。初めて雪かたしをするという学生もいて、慣れない作業に戸惑いながらも、懸命に取り組んでいた。三島町にて（福島民報2012/2/16, 20面）</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【カテゴリーV】 民間主導型協働の除雪（表9）

a.公私協働の除雪（6）	<p>・屋根の雪を一齐におろすため、地区の道路を通行止めに規制する「一齐除雪」を行った。上越市にて（新潟日報2012/2/1, 13面）</p> <p>・住民総出で屋根の雪おろし。阿賀町津川で道路を通行止めにして一齐除雪を実施した。阿賀町にて（新潟日報2012/2/10, 12面）</p> <p>・住民と道路管理者の県、市が役割分担して一定区域の雪を運び出す官民協働一齐排雪を行った。あらかじめ住民側と道路管理者が覚書を交わし、住民は雪捨て場の確保とダンプカーの借り上げ費用などを負担する協働事業。河島山地区では県道700メートルと市道1.3キロの区間で130戸が参加した。1戸あたり3千円ずつ出し合った。村山市にて（山形新聞2012/1/23, 2面）</p> <p>・高齢者宅等の除雪に役立ててもらおうと家庭用除雪機の無料貸し出しを町社会福祉協議会が実施している。西川町では、除雪費の半分以上を町が負担する除雪ヘルパー制度を設けたり、町内会単位で除雪ボランティア団体を立ち上げたりするなど、町を挙げて高齢者の除雪支援に取り組んできた。国の地域支え合い体制づくり事業の助成を受け購入した除雪機が活用されている。西川町にて（山形新聞2012/1/25, 16面）</p> <p>・三之町区では3年前から若手8人で若連中隊を結成し、一人暮らし高齢者の見回りや防犯パトロール、除雪ボランティアを続けてきた。こうした取り組みを知った市から同地区に対して「県の地域支え合い体制づくり事業」への申請を勧められ、150万円が認められたため除雪ボランティアに活用する除雪機を購入できた。これまでの除雪ボランティアが県に認められた形で、同地区では「こうした活動がもっと広く行き渡り、地域の繋がりが構築できたら」としている。同地区で除雪機の操作方法の説明会を開催し10人が参加した。同区長は「住民が力を合わせて住みよい環境を作っていきたい」と話した。村上市にて（新潟日報2012/1/6, 14面）</p> <p>・保内郷除雪サポートチームのメンバーは、県の地域支え合い体制づくり事業補助金でスノーダンプや除雪機を購入した。保内郷と呼ばれる5つの地区内の住民50人で構成するボランティア組織で、34世帯の高齢者宅等を対象に除雪ボランティアを行っている。この日は新規購入した除雪機の使い方を業者から習うために30人が参加した。参加者男性（66）は「機械には直に慣れそう。しっかりやって、地元の人にも応援してもらいたい」と張り切っていた。会長・男性は「地域の方が安心して生活できるようにフル活動したい。何よりも継続が大事」と話した。長岡市にて（新潟日報2012/1/27, 14面）</p>
b.地域住民による協働の除雪（6）	<p>・能代市上町自治会では、独自に積み立ててきた基金を活用してローダーやダンプを借り、地区内の除排雪を行った。毎月の会費500円のうち、200円を災害対策費として積み立てており、大雪となったため5年ぶりに独自除雪を実施した。建設業者や市から借りたダンプやローダー10台を投入し、朝9時から午後4時まで道路除雪を行った。住民80人も参加し、交通誘導や一人暮らし高齢者宅の除雪を手伝った。なお、借り賃は20万円超となった。「いきなり多額の町内会費は集められない。備えが必要」と自治会長は指摘した。また、「行政が全てやってくれるという時代ではなく、なってきた。自治会自身が生活のためにできることをしなければならない」とも話した。同自治会では、雪寄せが困難な高齢者宅や滑りやすい道路の把握、排雪場所の確保などを考えるワークショップも開催している。能代市上町にて（秋田さきがけ2012/2/6, 20面）</p>

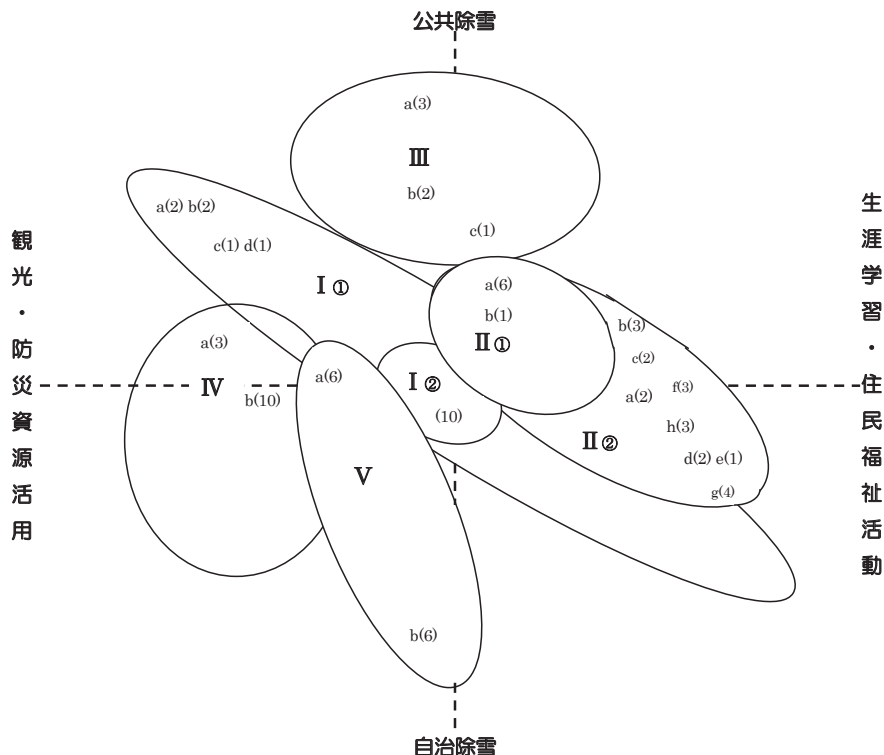


<p>・北秋田市三木田地区の消防団や自治会などでつくる「雪寄せ隊」が、一人暮らし高齢者の玄関先16軒等を除雪するボランティアを実施した。併せて集落内の空き家4軒の雪おろしも行った。集まった隊員16人で朝8時半から午後4時半まで作業を行った。北秋田市にて（秋田さがけ2012/1/25, 20面）</p> <p>・大通商店街組合の会員が、買い物客のために歩道の一斉除雪を実施した。盛岡市にて（岩手日報2012/2/3, 18面）</p> <p>・「町中には高齢者も多く、安心して商店街に足を運んでほしい」と、商店街のアーケードの一斉除雪を行った。商店街振興組合員30人が参加した。加茂市にて（新潟日報2012/2/14, 14面）</p> <p>・自主防衛組織「旭町自衛防災会」が除雪お手伝い隊を結成し、高齢者宅などを除雪した。同組織が除雪に協力するのは市内初となった。お年寄りは感謝の言葉を口にしていった。会長・男性は「高齢者の安心、安全を守るためボランティアを募った。自然な形で、隣近所ですればいい」と話した。五泉市にて（新潟日報2012/2/15, 10面）</p> <p>・むつ市料理飲食店組合の有志ら約40人が市内中心部の飲食店街「ふれあい通り」の一斉除排雪を行い、利用客が歩きやすい通りを確保した。店主らの一斉雪かきには常連客も応援に駆け付けた。駆けつけた建築会社代表は「高齢世帯の除雪の予約で手一杯とあって、正直もう雪は見たくないが、前の日飲みに来て召集されてしまった。まあ、自分もここで転んだ客の一人なので、少しでも助けになればいいです」と笑った。むつ市にて（東奥日報2012/2/18, 21面・東奥日報2012/2/21, 15面）</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

#### IV. 考察

表3から表9のように、対象紙の地域欄を中心に雪を介した住民の互助や公私協働の特色が集中的に見られた記事を検討した結果、大きく5つに分類でき、活動領域の幅広さを実感した。その5つの領域について概念図に示しながら考察を加えたい。

図1. 今回の調査結果から導かれた住民の互助、雪を介した協働活動の領域（射程）についての概念図



※注）表3～表9についての【カテゴリーⅠ～Ⅴ】に対応。ⅠとⅡにはそれぞれ①、②の中項目が存在し、小項目はa,b,c…のように、（ ）は記事数をあらわしている。

第1に、【カテゴリーⅠ】《資源活用①》では、婚活支援や観光ツアー（含むグリーンツーリズム）の一環に除雪体験等を活用したり、果樹を雪の被害から守る用具に地元の間伐材を利用したりするという前向きな実践が位置付けられた。観光資源や防災対策への雪の活用が特徴として見受けられた。また、《資源活用②》には被災地の児童を招待したスキー教室や雪遊び交流イベントの開催をしている実践が位置づけられ、震災前までにはなかった新しい機運が見られた。いずれも、地域の活性化に向けた自立精神と他地域との交流と連帯に向けた意欲をもって行われているものと考ええる。

第2に、上記と重複する部分も多いのだが趣が少し異なるということで、【カテゴリーⅡ】《学習効果①》に分類したものがある。たとえば、除雪作業は危険を伴うため安全に行うための方法を皆で学ぶ機会を作ったり、警察による高齢者世帯の見回りも兼ねて安全な除雪作業を心がけるよう呼びかけを行ったりする取り組みである。雪の対策を共通課題として認識し、共通課題の克服に向けた絆づくりを創出するきっかけに活用している側面があるものと考えられる。なお、消防署等の主催であることから公共サービスの要素が大いに含まれている。《学習効果②》としては、地域の文化財や芸術作品等を雪から守るために力を合わせてそれらを除雪したり、伝統芸能活動を続ける上で普段から地域住民に協力してもらっていることへの恩返しのため地域内で困っている高齢者宅の除雪をしたり、芸能発表の会場となる場所の除雪をしたりし、生涯学習の一環としての性格を有するものも確認された。これと近接するスポーツ振興と除雪の結びつきにも触れると、雪国のプロサッカーチームの練習場確保のためにグラウンドの除雪に大勢の市民が集まって協力する実践も確認できた。さらに、除雪ボランティアという体力面での協力だけでなく、除雪費が枯渇して大変な思いをしていることを察し高校生が義援金集めに協力するという雪を介しての金銭的な協力による活動領域も存在することがわかった。また、福祉のまちづくりの担い手を養成するという観点から、正に住民の福祉活動と生涯学習の連携がうまくいった実践として特筆したいものも見つかった。福祉のサービス対象と思われがちな障害をもった人達ができる範囲で除雪ボランティアをして高齢者を助けている実践が見られたからである。ここに分類した中で学習効果が期待される特徴を示した残り2つも加えたい。除雪という生活課題を抱えた世帯がありそこにボランティアに行くことで担い手が感謝の言葉をもらい達成感を得ることから学ぶため、あるいは積雪地帯の生活の厳しさを実地に学ぶため大学生の教育に取り入れている実践があった。さらに、除雪ボランティアが優れた価値を与える力を内に秘めていることを示唆するものとしては、統一活動日として称して積雪が少なく除雪の必要がなくても安否確認の声掛けを実践することにより、除雪活動に留まらず援助を必要とする高齢者と担い手住民の連帯感を醸成させるきっかけづくりとなっているものが見つかった。以上のとおり、【カテゴリーⅡ】に分類された実践はいずれも、雪を介して住民が関心を持って集まり、楽しく活動していることが共通する部分に当たるものと指摘でき、除雪ボランティアの団体活動を行う上でも貴重な示唆が得られるものと考ええる。

第3に、【カテゴリーⅢ】行政施策には、公共サービスとしての除雪なのだが市民との協働の要素を出来るだけ取り入れようとする努力が垣間見られるものが位置付けられた。たとえば、市役所職員による公務除雪を親しみやすくするためユニークなネーミングをつけることや安全な除雪を行えるように用具の貸出を行っていること、そして除雪に困難を抱えている市民の声を反映させられる会議の開催といったような工夫が見られたからである。とりわけ、除雪弱者の声を聞く機会を事業として実施している取り組みも見られ、行政施策の中にも学習要素が含まれる実践があることも見出されたと考える。

第4に、【カテゴリーⅣ】行政主導型協働の除雪には、行政が積極的にリードすることで公私協働による効率的な除雪が実現されたという記事が比較的多く見受けられ、これらが位置付けられた。たとえば、新潟県の除雪ボランティア「スコープ」のように広域的に協力者を得るため県が広報し、豪雪となった市や町と連携してボランティアの活動場所の選定、そして参加者への連絡やメンバー登録（登録者には以降もボランティアの参加を電子メールで配信）といった調整業務を担っている実践も見受けられた。山形県尾花沢市や最上町のように防災協定を結んだ積雪地以外の市等から除雪の担い手協力を得て同時

に交流も図っている実践も見られ、このうち尾花沢市では国土交通省の「共助による地域除雪」のモデル事業<sup>5)</sup>も行われていた。新潟県の除雪ボランティア「スコープ」の協力者にしても、山形県の2つの市と町の防災協定を結んだ市等との相互協力にしても、雪のない地域から訪れる人たちにとって観光要素を含みながら併せて除雪ボランティアの担い手をうまく確保できているところに特徴が見出せる。先行研究論文でも指摘されているように「わざわざ駆け付けた人がいるので地元住民も協力しないといけないという一斉除雪実現のための呼び水効果」<sup>6)</sup>も期待されるからである。とはいえ、高齢化が進んだ地域ほど地元での担い手確保が困難になり、広域的に担い手を集める取り組みに期待が寄せられ始めているが、その普及に向けては課題も多い。活動地域の住民の主体的参加ももちろん大切だが、地域の内外から活用可能な人的物的資源を導入するコーディネートが求められ、この方法が確立しているとはいえない難いからである。この機能が役割を果たすことにより除雪ボランティアに参加する人が確保され、地元住民と一体となって効率的に一斉除雪が行えることになる。安定的にサービスを提供、利用もでき、かつ持続可能な仕組みづくりを進めるにはまだまだ乗り越えるべき課題は多く、やはり、一つの市町村だけでこの仕組みづくりを行うには負担が大きい。そのため、県内外問わず広域的な地域連携を進めようとするならば新潟県の除雪ボランティア「スコープ」のような県レベルの行政主導による効率的な協働除雪の推進にも注目していかなければならないと考える。

第5に、【カテゴリーV】の民間主導型協働の除雪についてである。住民の一斉除雪実現のために道路の通行止めへの協力、地域住民が除雪ボランティアをする際に共同利用するための除雪機械購入費の助成、あるいは除雪ボランティアの経費を助成するといった形で民間が主導する協働除雪でありながらも、行政の一部協力がなければ達成し得ない活動も見受けられた。行政との連携も密で住民相互扶助による実践である点で大きな特色といえる。他方、地域における一斉除雪の費用に備えをしておこうと町内会費の一部で基金を作って自主財源で賄う実践も確認された。これは豪雪地域の地域特性を踏まえ住民の自治精神に立脚した協働除雪の特徴が顕著に表れているものと評価できる。阿部志郎は「なにものにも強制されることなく行動する自発性に根ざし、行政に甘えず、真の自立を獲得しようとするボランティアは、相手の自立を尊重してやまない。ここに連帯が芽生え、福祉が育つ」<sup>7)</sup>と指摘しているように、住民の自発的な助け合いでの除雪活動の掲載は僅かながら、価値ある実践として注目すべきである。なお、これらの取り組みが始められているきっかけは、人口高齢化が進めば進むほど除雪の困難な世帯が増え地域に暗い影を落とすため、地域共通課題と捉え公私協働の実践で困難な世帯を支援することを進めなければならないという思いが背景にあるものと考ええる。

## V. 結語

調べた記事の件数としては1,761件に達したものの、掲載された僅かな記事の文章の情報のみを用いて行う事例検討であるため限界がある。それでも、今回収集した事例だけでも前向きな思考から雪を介した様々な協働活動を確認し、楽しみや興味を引く要素が含まれていると思われるものが相当数見出された。繰り返しになるが、雪の利用価値を見直し、利雪を一層推進すること、雪国の「寒い、暗い、つらい」というマイナスイメージを払拭し、住民や観光客に雪に親しんでもらえる取り組みを進めること、というような前向きなとらえ方をしている実践がいくつか見出された。実際にこのように除雪をより多角的に、前向きにとらえようとする傾向は注目されてきており、積雪の多い県が立てている行政計画等<sup>8)</sup>の中にもこうした発想が反映されている。

除雪ボランティアを主目的とはせず、副次的に行っているところ、あるいは雪を活用して協働で楽しみを生み出すという克雪の取り組みが多様に行なわれている実態も見られた。これらの活動の有する魅力的要素を、除雪ボランティア活動を行う際にもうまく取り入れることができないだろうか。前述の、前向きな雪の活用の様々な実践の魅力についても同様である。それこそ、地域特性に応じてこうした要



素を組み入れていければ、複数の魅力を持つ除雪ボランティア活動になる。だからこそその魅力を求めて参加者が集まり、切れ目のない活動展開が可能となるはずである。除雪ボランティア活動に彩りを加えるための選択肢と成り得る情報をいくつか示すことができたならば、本稿執筆の甲斐があったものと思われる。

## 注及び参考文献

- 1) 高橋和幸, 2010, 「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究（その1）」『ノースアジア大学総合研究センター教養文化論集』5(2):111-124
- 2) 高橋和幸, 2011, 「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究（その2）」『ノースアジア大学総合研究センター教養文化論集』6(1):115-129
- 3) 高橋和幸, 2012, 「除雪ボランティアを通じた互助・共助コミュニティの構築に関する研究（その3）」『ノースアジア大学総合研究センター教養文化論集』7(1):183-193
- 4) 大雪に対する防災力の向上方策検討会, 2012, 「大雪に対する防災力の向上方策検討会報告書」, 内閣府:31
- 5) 尾花沢市での広域的なボランティアを活用した大掛かりな一斉除雪については新聞記事だけでは把握し切れなかったもので、先行研究を調べた。国土交通省によると、社会実験段階であるが、安全かつ効率的に雪処理を行うために、地域コミュニティ（自治会、町内会、集落等）において、手順やルールなどを定めた上で、住民（地域外の担い手含む）が協力しながら時間を合わせて一緒に家屋及び家屋周辺、歩道や生活道路などの公共空間、公民館等の地域の共有施設などの除雪作業をモデル事業として実施段階であるとのことだった。検証の際の仮説として、まず地域コミュニティ効果を挙げ、これには地域内における全体への影響として、①住民間の連帯感が向上し、地域の防災力が強化される。②雪処理の担い手が確保される。③地域における冬期道路交通の安全性が向上する。④地域の雪問題を解決するための場（機会）が生まれるのではないかとされている。また、各世帯における効果としては①除雪作業中の事故を防止や被害を軽減できる。②家屋・玄関先や車庫の周辺など、敷地内の積雪による閉塞感を改善できる。③各世帯における防災力が向上する。④大人数が協力することで、効率よく雪処理ができる。⑤高齢者世帯等にとっては、雪処理の相談をするきっかけとなるのではないかと挙げられている。そして、行政における効果については①雪害による犠牲者を防止できる。②冬期の道路空間を効率的に確保できる。③雪問題に対する住民の関心や主体意識が高まる。④豪雪時における行政の対応力を確保できると期待が寄せられていた。国土交通省都市・地域整備局地方振興課, 2010, 「共助による地域除雪の手引き～安全、効果的な雪処理方策のマニュアル、ポイント～」:1-14。また、実際に尾花沢市「共助による地域除雪」を経験した尾花沢市雪研究会運営部会長の二藤部久三氏によれば「高齢者宅の支援だけでなく雪国に暮らす中学生の防災教育としての教育効果があり、活動実施後も生徒と高齢者との交流が生まれた」「作業終了後は、共同作業の有効性や危険な除雪作業について等意見交換を公民館で行い、参加者全員で安全な雪下しについて協議し交流を深め、さらに強固な絆が世代を超えて生まれた」との指摘もある。2012, 二藤部久三, 「共助による地域除雪の実践（特集豪雪地帯対策のこれから）」『人と国土21』, 国土計画協会, 38(1):16-19
- 6) 2006（平成18）年1月21日に秋田県藤里町「地域一斉除雪」における広域ボランティアの導入事例では、「遠方から来るボランティアに対して、地元住民も参加しないと申し訳ない」という声が聞かれ、結果として呼び水効果が示された。林野庁, 2007, 「豪雪地帯における安心安全な地域づくりに関する調査報告書」:200
- 7) 阿部志郎, 1997, 『福祉の哲学』, 誠信書房年:90
- 8) 一例を挙げれば、長野県「第六次長野県総合雪対策計画」（平成24年度～平成28年度）では、今後の雪国づくりの基本的な考え方が示されている。大雪の被害の中には、「自助」や「共助」による備えが十分であれば防ぐことができたと思われるものが少なくないため、住民や地域コミュニティが主体となった防災・減災対策を推進する。豪雪地帯の多様なニーズにに応じていくために、コミュニティ組織やNPO等の多様な主体の活動を活性化させ、協働型社会を構築していくことが強調されている。また、雪国の「寒い、暗い、つらい」というマイナスイメージを払拭し、住民や観光客に雪に親しんでもらえる取り組みを進めることも挙げられている。具体的には、ウィンタースポーツ学習の推進、除雪ボランティアの確保や道路管理者同士の連携による交通確保、スノーリゾートづくりなど観光の振興、雪を活用した農産物の生産振興、雪国の伝統工芸品の振興、雪氷冷熱エネルギーの普及支援などの調査研究の推進等が掲げられている。
- 9) 国土交通省国土政策局, 2012, 「平成22年度、平成23年度の大雪の被害概況と課題」:1-18
- 10) 功刀岳秀, 2012a, 「新潟県の雪対策：冬期集落支援、除雪ボランティアの展開、降雪量予測情報提供（特集豪雪地帯対策のこれから）」『人と国土21』, 国土計画協会, 38(1):24-29
- 11) 功刀岳秀, 2012b, 「新潟県における除雪ボランティア「スコープ」の活動状況（特集平成24年（2011/12冬季）豪雪・雪害対策最前線）」『日本雪工学会誌』, 28(2):133-135
- 12) 山形県企画振興部市町村課, 2012, 「山形県における広域除雪ボランティアの普及促進に向けて（特集平成24年（2011/12冬季）豪雪）」『日本雪工学会誌』, 28(2):136-139
- 13) 湯原麻子, 2011, 「中山間地域における冬期地域防災力強化のためのコミュニケーション活性化手法」, 『土木研究センター土木技術資料』, 53(8): 42-45
- 14) 沼野夏生, 2009, 「減災戦略としてのコミュニティ共助とそのツール「除雪支援マップ」の試作について」, 『日本雪工学会誌』, 25(3):170-173

- 15) 上村靖司, 2008, 「“雪かき” がつなぐ人の輪 (特集 雪国のコミュニティづくり)」, 『ゆき』, 雪センター, (71):11-14
- 16) 塩見一三男、木村一祐、笈川卓也, 2007, 「集落一斉除雪及び農業従事者の除雪協力による地域共助の除雪：豪雪地帯における安心安全な地域づくりに関する調査報告その 4」, 『日本雪工学会誌』, 23(4): 73-74
- 17) 笈川卓也, 2007, 「秋田県の除雪ボランティア活動の状況とこれから」, 『ゆき』, 雪センター, (68):28-33
- 18) 一番ヶ瀬康子, 1983, 「子どもの発達と福祉教育」『学校における福祉教育実践Ⅰ』 光生館 :2-14